

事業計画及び成長可能性に関する事項



2026年6月25日

株式会社坪田ラボ

VISIONary INNOVATIONで 未来をごきげんにする

当社は、“VISIONary INNOVATIONで未来をごきげんにする”というパーパスを掲げ、近視、ドライアイ、老視、脳疾患などに対する科学的根拠に基づく革新的ソリューションの創出に取り組んでいます。慶應義塾大学医学部発の研究開発型ベンチャーとして、社会課題化する視機能や脳疾患に挑み、社会的意義と経済的価値の両立を目指しています。

「VISIONary INNOVATION」は、“視機能”に関わる疾患への深い“洞察”（“Vision”）、と未来を見据えた先見性と革新性（“Visionary”）を融合させた当社の中核的価値観です。ScienceとCommercializationの掛け合わせにより未来志向の医療・ヘルスケア製品の創出を目指す、坪田ラボ独自の経営哲学です。

目次

- 1 会社概要
- 2 ビジネスモデル
- 3 R&D戦略
- 4 事業計画
- 5 Appendix



1

会社概要

会社概要

会社名 株式会社 坪田ラボ

代表 坪田 一男

設立 2012年5月28日

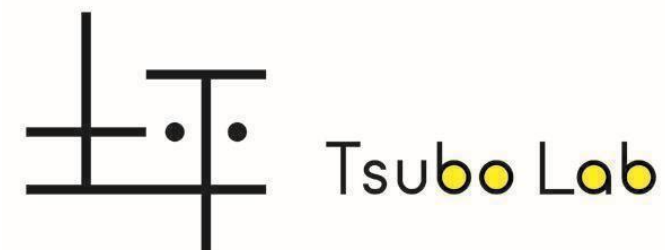
資本金 825,197千円

所在地 〒160-8582 東京都新宿区信濃町35慶應義塾大学
信濃町キャンパス2号館9階 CRİK信濃町E7

従業員 20名（2026年3月現在）

主要株主 坪田一男、（株）坪田、大高 功、ロート製薬（株）

事業内容 近視、ドライアイ、老眼、脳疾患を中心とした研究・開発



株式会社坪田ラボ 代表取締役社長

臨床から研究まで手がけ、眼科領域と抗加齢に渡って牽引する第一人者。強いサイエンスでごきげんな社会へ



株式会社坪田ラボ 創業者/代表取締役社長

坪田 一男 MD, PhD, MBA

主な関連団体（役職）

日本ドライアイ研究会（Founding President）/日本眼科学会（元評議員）/日本角膜移植学会（元理事）/日本角膜学会（元理事長）/近視研究会（世話人）/日本シェーグレン病学会（顧問）/日本再生医療学会（名誉会員）/日本ポジティブサイコロジイ医学会（副理事長）/日本抗加齢医学会（元理事長）/慶應義塾大学医学部発ベンチャー協議会（代表）/全国医学部発ベンチャー協議会（副代表理事）

※過去に就任していた役職を含む

略歴

- 1980年 慶應義塾大学医学部 卒業
- 1983年 国立栃木病院 眼科医長
- 1985年 米国ハーバード大学 留学
- 1987年 国立栃木病院 眼科医長
- 1990年 東京歯科大学 助教授・市川総合病院 眼科部長
慶應義塾大学 非常勤講師
- 1998年 東京歯科大学 教授・市川総合病院 眼科部長
- 2004年 慶應義塾大学医学部 教授・慶應義塾大学病院眼科診療部長
東京歯科大学 客員教授
- 2012年 株式会社坪田ラボ 創設
- 2019年 慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程修了（MBA）
- 2021年 慶應義塾大学 名誉教授

主な受賞歴

- 1988年 日本眼科医会学術奨励賞
- 1991年 興和財団研究奨励賞
- 1992年 上原研究財団研究奨励賞
- 1994年 Honor Award, American Academy of Ophthalmology
- 1997年 坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金 慶應義塾大学医学研究奨励事業（奨励研究）
- 2000年 The First Claes Dohlman Award, Tear Film and Ocular Surface Society
- 2004年 Senior Achievement Award, American Academy of Ophthalmology
- 2011年 Lans Distinguished Award, International Society of Refractive Surgery
- 2012年 第四回日本シェーグレン症候群学会賞
- 2017年 第30回ボストン角膜カンファレンス クラースドールマン アワード受賞
- 2020年 American Academy of Ophthalmology's Life Achievement Honor Award
- 2026年 The 2026 Moacyr Álvaro Gold Medal, SIMASP 2026

役員一覧

取締役



代表取締役社長 CEO
坪田 一男



取締役 CBO 事業開発本部長
久保田 恵里



取締役 CRDO 研究開発本部長
森島 健司



社外取締役
小泉 信一

監査役



常勤監査役 (社外)
増田 猛



社外監査役
堤 康之



社外監査役
村田 真一

沿革

株式会社坪田ラボは、慶應義塾大学医学部眼科教授を務めた坪田一男が創業した臨床と研究を起点に社会実装を目指す医学部発ベンチャー企業です。

2012

- 当社の前身である株式会社ドライアイKT設立

2015

- 株式会社坪田ラボ創業

2019

- 坪田一男が代表取締役社長に就任
- バイオレットライト照射デバイスのプロトタイプ完成

2022

- 東証グロース市場へ上場
- 点眼薬開発着手

2023

- 日本スタートアップ大賞 審査委員会特別賞を受賞

2024

- 本社を慶應義塾大学信濃町キャンパス内「CRIK信濃町」に移転
- 中国Eye Valleyに拠点を設置

2025

- 10周年を迎える
- 米国シアトルに拠点を設置
- 知財功労賞 特許庁長官表彰

企業理念

Purpose
なぜ私たちは存在するのか

VISIONary INNOVATIONで未来をごきげんにする

Vision
私たちはどこに向かっているのか

Light. Science. Happiness.

光と科学で、世界のひとびとの“ごきげん”を共創する

Culture
私たちが大切にしている価値観・行動指針

ごきげん

Value Action Purpose / Vision / Culture 実現のための行動指針

- Spread GOKIGEN. 自分から、ごきげんを広げる。
- Lead with Kindness. 笑顔、親切、寛容であれ。
- Keep Learning, Create Together. 学び続け、共に創る。
- Think, then Move Fast. 考え、迷わず、すぐに動く。

事業概要

確かなサイエンスをもとに、複数のパイプラインを創出・開発

主なターゲット市場：近視 / ドライアイ / 脳・中枢領域（うつ病・パーキンソン病など）



坪田ラボの特徴

医学部発

複数パイプライン

導出での収益化

成長市場への参入

2

ビジネスモデル

坪田ラボの企業価値を構成する主要要素

足元の売上規模だけでなく、パイプラインの価値（＝パイプラインの進捗・知財・導出可能性・将来収益など）によって形成される

企業価値を形成する要素

価値創出の基盤

パイプラインの進捗

主要パイプラインの進展が企業価値向上を牽引

複数パイプライン

成長機会とリスク分散を両立

知財・独自のノウハウ

VL技術・知財基盤が競争優位性を支える

企業価値

価値拡大のポテンシャル

対象領域・アンメットニーズ

対象疾患領域のアンメットニーズが成長余地を形成

導出・提携可能性

大手製薬会社との導出・提携の可能性が企業価値を一段と高める

将来の収益期待

導出後の収益ポテンシャルが価値創出につながる

ビジネスモデルの全容

自社 / 共同研究先との研究成果・知財をパートナー企業に導出し、
契約一時金とマイルストーン、上市後のロイヤリティ収入で主な収益を構築。
それに加え、化粧品や光デバイスなど日常のヘルスケア事業へも拡大

共同研究先等・関連事業会社はこれまでに30社以上

研究・探索

開発（治験）

製造・販売

Science
共同研究先と探索的な基礎研究

×

Commercialization
研究成果を知財化、商業化

導出後は、導出先主導で治験を実施
→ライトアセットで研究開発を回すことができる

研究開発費

研究成果
知財

契約一時金
マイルストーン

ロイヤリティ

共同研究先

国内外の研究機関
国内外の大学
慶應義塾大学・他アカデミア

医薬品・医療機器領域

事業会社（導出先）

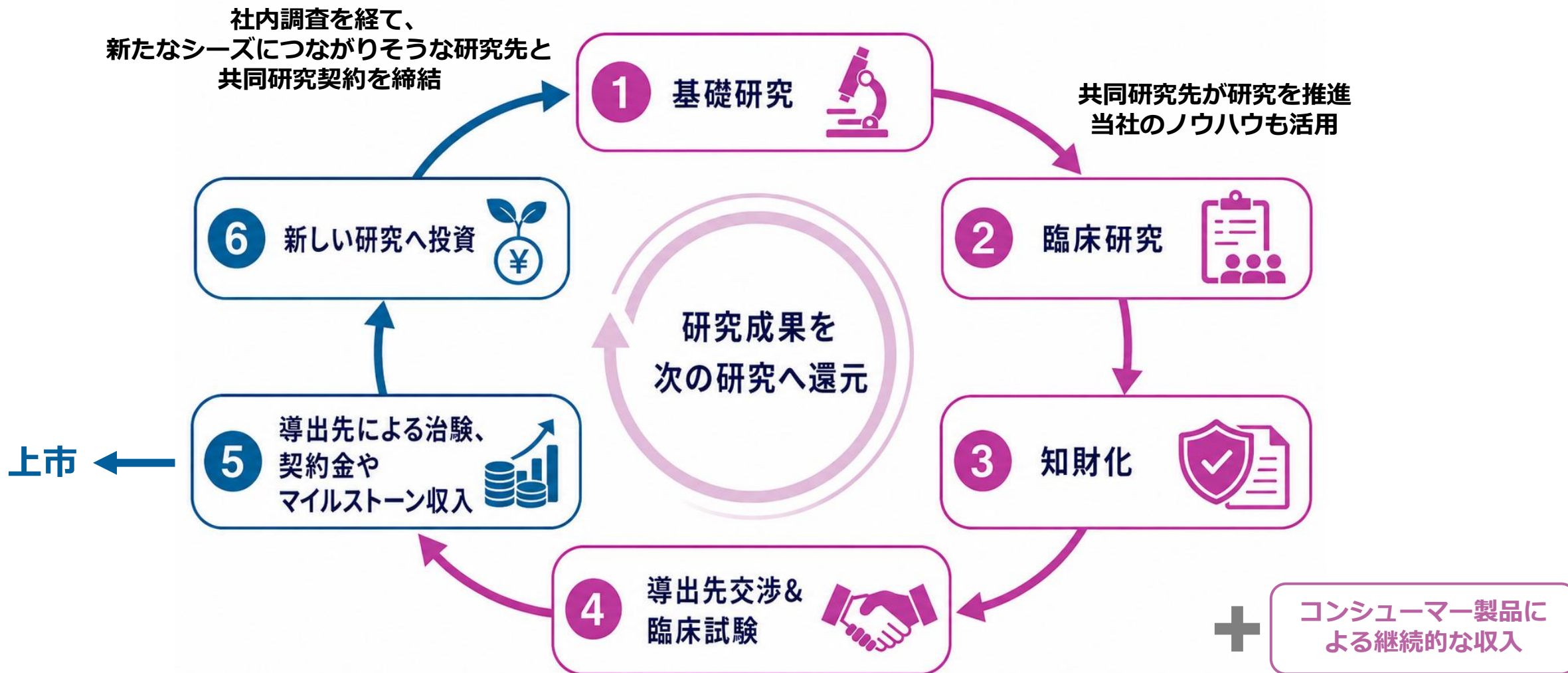
コンシューマー領域

事業会社（販売提携）

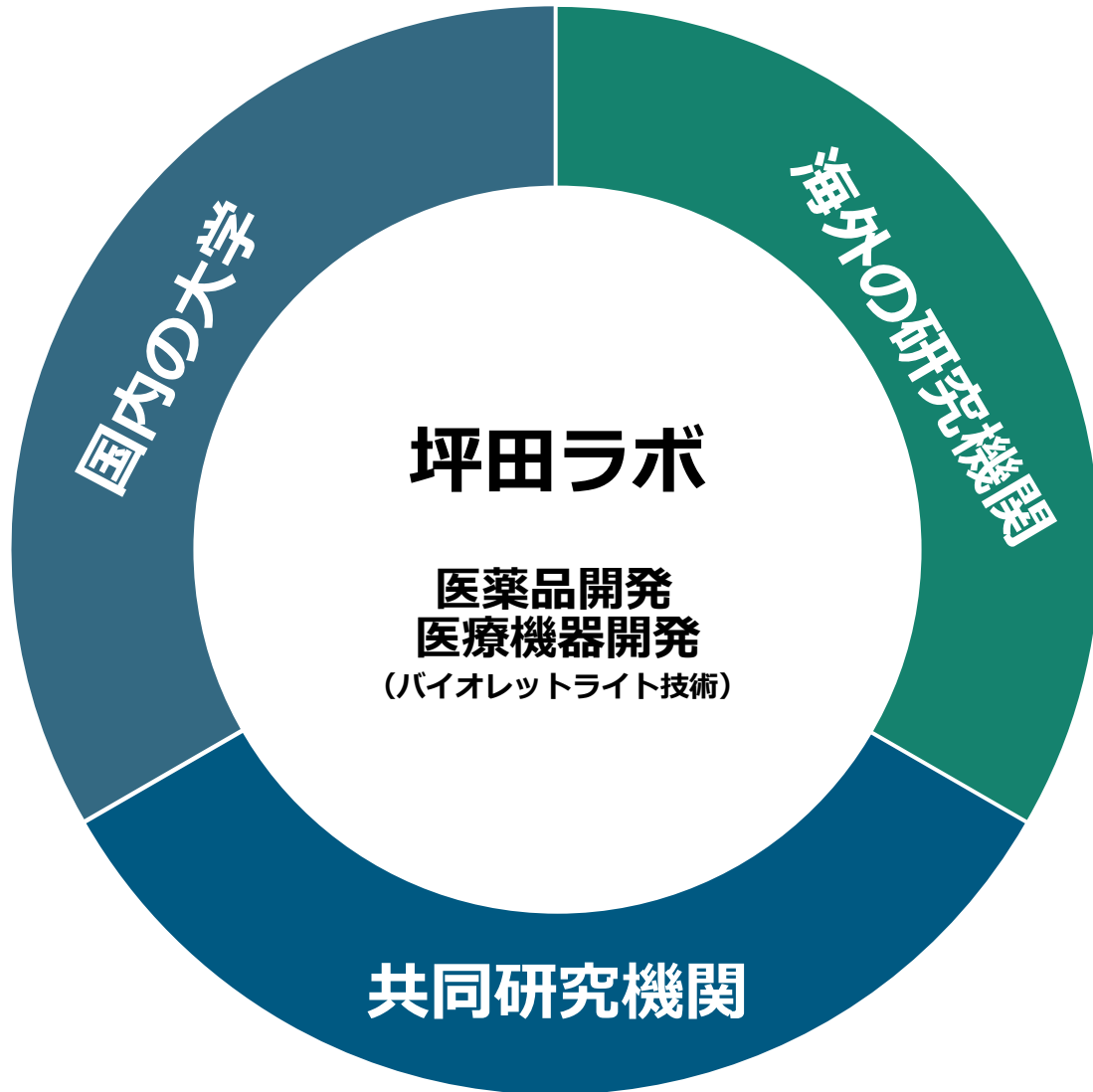
化粧品事業

ReLight Tech事業（ディスプレイ領域）

持続的なパイプラインの創出



アカデミア・外部研究機関との強固な研究体制



外部有カアカデミアと、共同で最先端研究を実行

コ・クリエーション コア CCC: Co-Creation Core

最小限の自前のアセット（研究員・研究施設）で、最大の成果を迅速に創出するための、坪田ラボ独自のR&Dモデル

大学や研究機関の革新的な研究活動を助成する制度（T-SBIR）を活用。成果を、当社と大学や研究機関が共同で特許出願し、当社が事業化する。

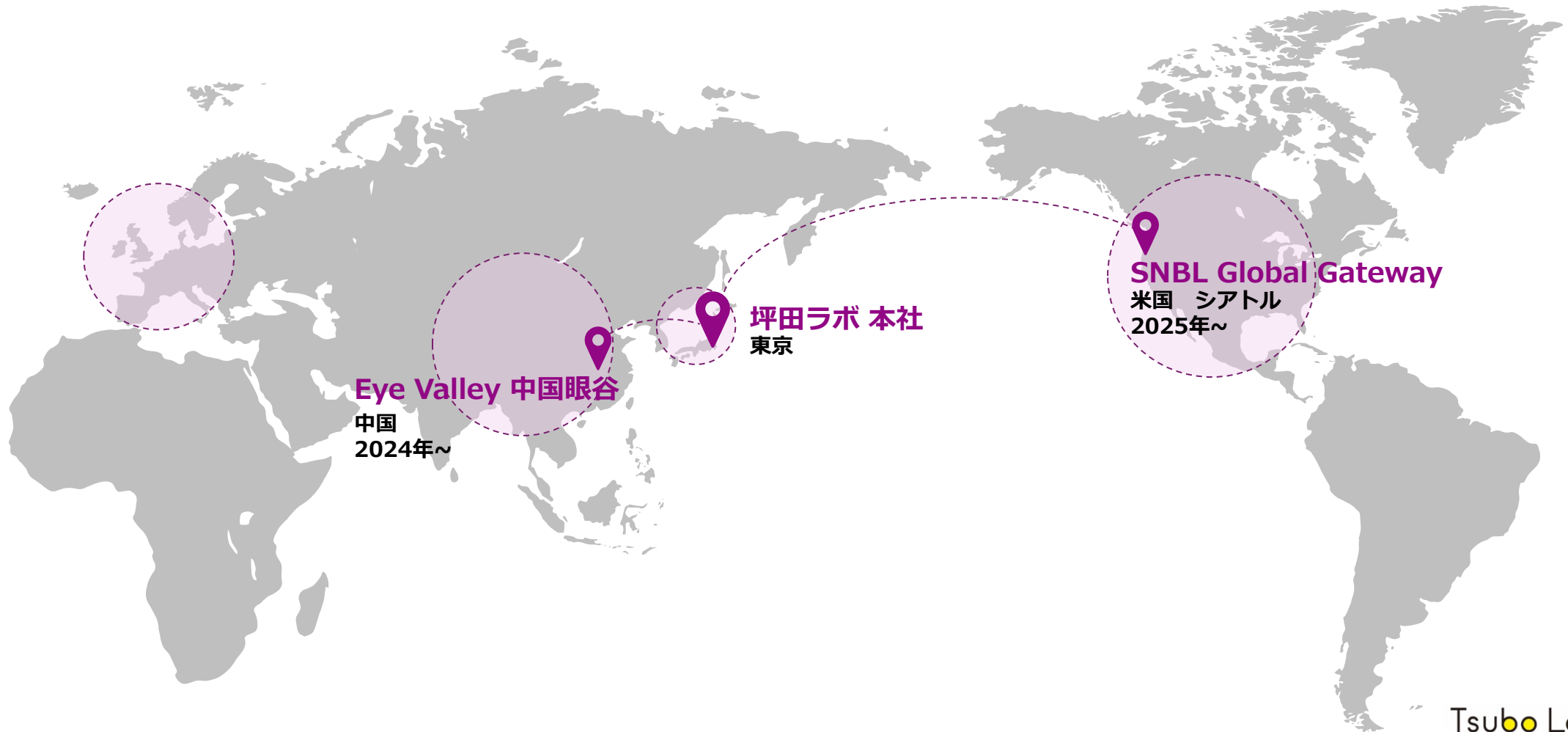
眼科疾患の新パイプライン発掘に加えて、バイオレットライトの脳神経疾患へ展開している。

国内の主な拠点：











慶應義塾大学信濃町キャンパス / 矢上キャンパス / 殿町タウンキャンパス

海外拠点を中心としたグローバルな事業開発

アメリカ・中国にオフィスを設置し、
現地のパートナーリング交渉と事業開発を強力に推進



グローバル事業開発（導出・契約）の進捗状況

コード	想定適応症	日本	中国	アジア	欧州	米国
TLM-001	マイボーム腺機能不全					
TLM-003	近視		非開示	 協議		
TLM-017	角結膜障害	協議	協議	○	○	○
TLM-018	OTC 点眼薬					
TLM-023	近視	協議	協議	○	○	○
TLG-001	近視		BYPT*	協議	○	○
TLG-003	円錐角膜	○	○	○	○	○
TLG-005D	うつ病	○	○	○	○	○
TLG-005P	パーキンソン病	○	○	○	○	○
TLG-020	網膜色素変性症		事業化前の探索フェーズ			
TLG-021	月経不順		事業化前の探索フェーズ			

当社ビジネスの強み：クロスドメイン戦略

医薬品・医療機器に加え、
コンシューマー向けのヘルスケア製品の開発・販売も並行して進める

点眼薬（医薬品） バイオレットライトデバイス（医療機器）

既存事業

ヘルスケア

新規事業

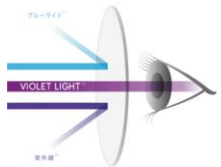


眼科領域（近視、ドライアイ、老視） + 脳中枢領域

サイエンスコスメ（化粧品）
エイジングケア領域

ReLight Tech
光環境領域

当社の知財を元に開発された製品（上市済）



TLCD-001



TLM-005



TLCD-018



TLM-004

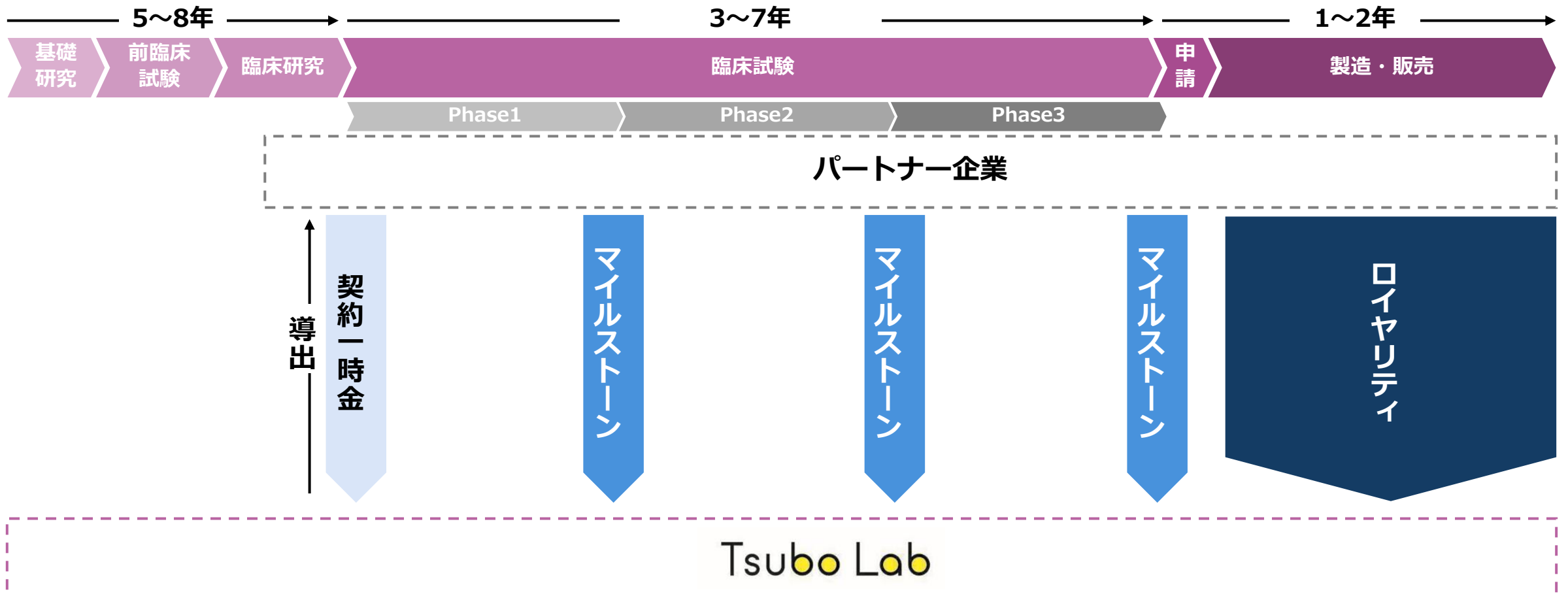


TLM-018関連製品

一つのプロジェクトでの収益獲得イメージ

自社で基礎研究から臨床研究（～初期臨床試験）まで行い、その後パートナー企業が臨床試験を実施。
契約一時金と、マイルストーンによる継続的な収益を確保し、上市後はロイヤリティによる安定した収益構造へ

- 契約一時金：契約締結時に受け取る収入
- マイルストーン：開発の各段階をクリアすることで得られる成功報酬
- ロイヤリティ：製品販売後、売りにげに比例してはいる継続収入



3

R&D戦略

パイプライン一覧

※2026年6月時点

コード	想定適応症	パートナー	関連特許	基礎研究	前臨床試験	臨床研究	臨床試験			申請	上市	進捗・状況
							Phase 1	Phase 2	Phase 3			
TLM-001	マイボーム腺機能不全	maruho	登録 日米英独仏	完了			実施中					P2a 治験開始
TLM-003	近視	ROHTO ^{※2} Théa ^{※3}	登録 日韓欧 出願 米中泰越	完了			完了	実施中				国内外ともにP2 治験開始
TLM-017	角結膜障害	未定	出願 日米欧中台韓越尼	完了	実施中							特定臨床研究開始
TLM-018	OTC 点眼薬	ROHTO	出願 国際 (PCT) (日本を含む)	完了							上市済	上市
TLM-023	近視	未定	出願 日米欧中豪伯加尼 印韓墨馬星秦台越	完了	実施中							前臨床試験実施中
TLG-001 ^{※1}	近視	JINS BYPT ^{※4}	登録 日欧 ^{※1} 香星台韓 出願 中	完了							追加治験 計画中	中国治験準備中
TLG-003 ^{※1}	円錐角膜	未定	登録 日印 出願 米伯	完了								特定臨床研究完了
TLG-005D	うつ病	未定	登録 日 出願 米欧中以伯韓印	完了								特定臨床研究完了
TLG-005P	パーキンソン病	未定	登録 日米欧中加韓墨 出願 星泰越	完了								特定臨床研究完了
TLG-020	網膜色素変性症	未定	出願 国際 (PCT) (日本を含む)	完了	実施中							特定臨床研究開始
TLG-021	月経不順	未定	出願 準備中	完了								特定臨床研究完了

※1 バイオレットライト関連製品 (TLG-001、TLG-003) については、関連特許に加え、基本特許で保護。基本特許は日米中台韓で登録、欧韓星で出願中 ※2 国内、台湾、ベトナム、インドネシア

※3 Laboratoires Théa (米、欧) ※4 Beijing Yijie Pharmaceutical Technology (中国、香港、マカオ、台湾)

※ TLG-005Mについては、特定臨床研究において安全性に関する確認が得られた一方、対象患者層の明確化や有効性検証に向けた大規模臨床試験が必要となる可能性を踏まえ、現時点での事業性および開発優先度を総合的に判断いたしました。その結果、開発リソースをより優先度の高いパイプラインへ集中する方針とし、TLG-005Mを優先パイプラインから外しております。

近視進行抑制への多角的なアプローチ

点眼薬

アトロピン
(参天製薬)

TLM-023

点眼により眼の血流を増やす

TLM-003

虚血による強膜のコラーゲン変性を治す



近見作業

屋外時間の減少

眼の虚血

強膜菲薄化

近視進行



医療機器

ドットレンズ
(サイトグラス)

Diffusion Optics Technology
DIMSレンズ (HOYA)
MisightCL (Cooper Vision)

TLG-001

バイオレットライトで眼の血流を増やす

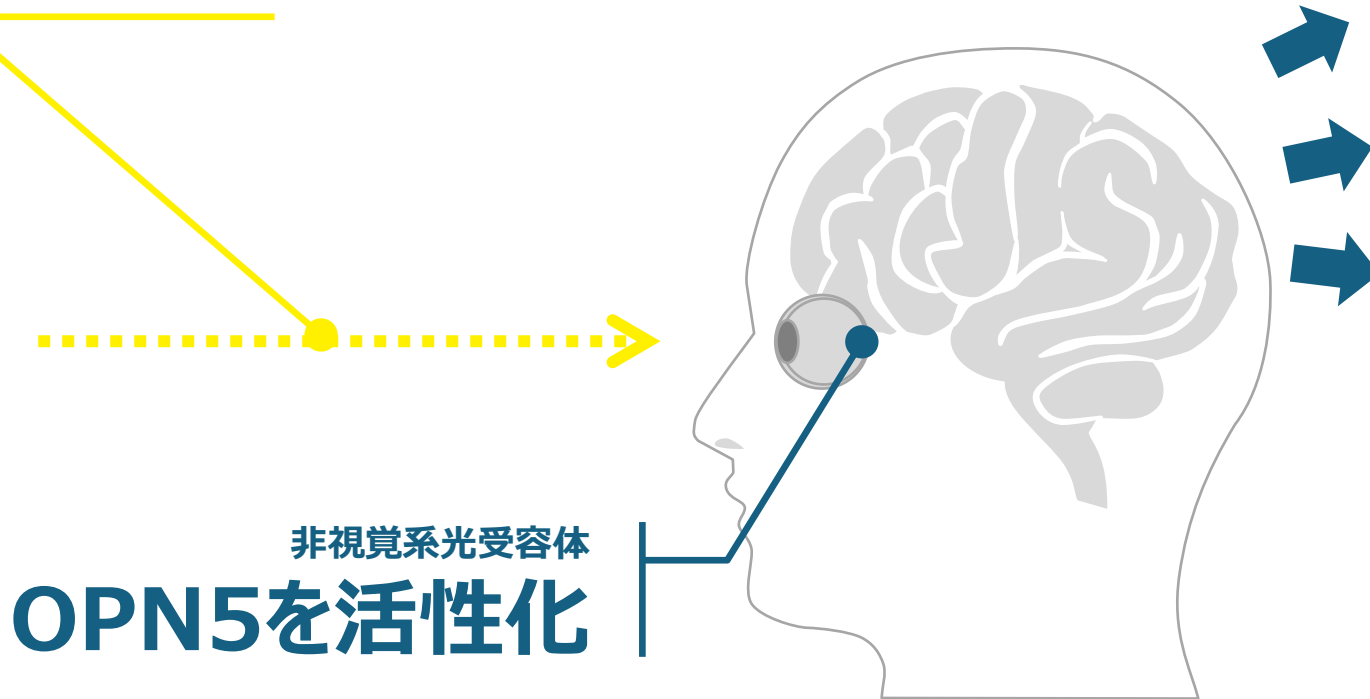
レッドライト治療
(Eyerising)

バイオレットライトの作用機序

バイオレットライトは、眼に加え、**脳の血流も増加**させる^{*}ことを発見

バイオレットライト

360~400nmの可視光



近視

うつ病

パーキンソン病

※：当社及び慶應理工学部満倉先生との共同研究成果「バイオレットライトによる脳血流動態計測(NIRS)変化」
(特許「光刺激による脳波及び細胞活性制御装置及び方法、並びに脳機能を改善、予防又は増大する装置」(WO2020/027305))

第2相臨床試験段階のパイプライン①：TLM-001

■ TLM-001について

当社では、ビタミンD関連物質とマイボーム腺機能の関係に着目し、ビタミンD関連物質を主成分とする眼軟膏の研究開発を進めている。本パイプラインは、眼表面の層別治療（右図）の考え方における「③マイボーム腺」および「油層」に着目したものであり、涙液油層の安定性に関する作用メカニズムの検証を通じて、眼表面領域における新たな開発可能性を探索している。

■ 疾患の特徴

ドライアイは、涙液層の不安定化などにより、眼不快感や視機能への影響が生じる疾患である。涙液層は水分だけでなく、油層・水層・ムチン層などが関与して眼表面環境を維持しており、特にマイボーム腺由来の脂質は涙液油層の安定性に関わる重要な要素である。

■ 研究開発

Phase 2a進行中

ドライアイの市場規模

2兆円

対象患者数：5～34億人

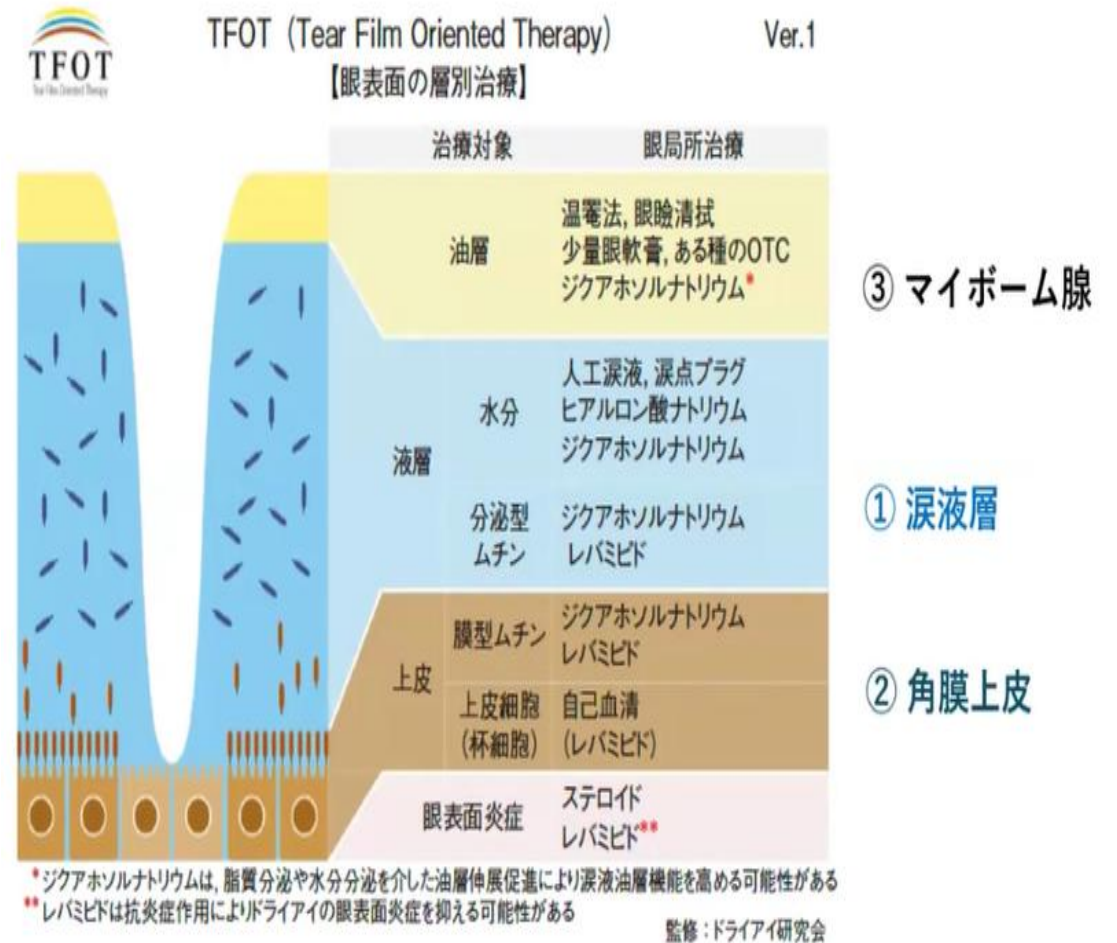


図9 眼表面の層別治療(TFOT)の概念図。

(ドライアイ研究会ホームページ <http://www.dryeye.ne.jp/tfot/index.html> より転載)

第2相臨床試験段階のパイプライン②：TLM-003

■ TLM-003について

TLM-003は、近視進行に伴う強膜の変化に着目した点眼薬の研究開発パイプラインである。本剤は、近視進行に関与すると考えられる強膜の非薄化および眼軸伸長に着目し、新たな作用メカニズムに基づく開発を進めている。

■ 疾患の特徴

近視は、眼軸長の伸長などにより、遠方の像が網膜より手前で結像することで視力に影響が生じる疾患である。進行に伴い眼軸伸長が進むと、将来的な眼疾患リスクとの関連も指摘されており、近視の進行メカニズムを踏まえた対応が重要とされている。

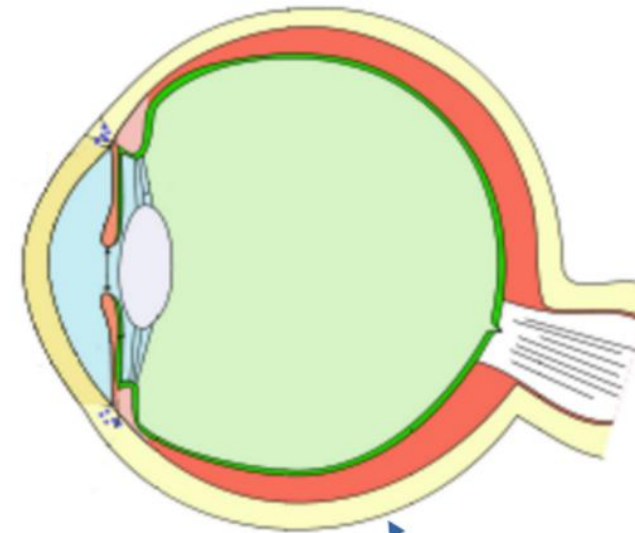
■ 研究開発

Phase 2進行中（国内外）

近視の市場規模

28兆円

対象患者数：26億人



強膜

外側を覆う丈夫な膜
一般的に白目と呼ばれる部分

出典：School Science Shed, "Eye sclera cornea.png", CC BY-SA 4.0（一部改変）

第3相臨床試験LPO : TLG-001

■ TLG-001について

TLG-001は、バイオレットライトを活用したメガネフレーム型の医療機器開発パイプラインである。本デバイスは、日常生活において不足しがちなバイオレットライトを適切に補うことに着目し、近視進行に関わる眼軸伸長のメカニズムを踏まえた開発を進めている。

■ 疾患の特徴

近視は、眼軸長の伸長などにより、遠方の像が網膜より手前で結像することで視力に影響が生じる疾患である。特に小児・若年層では近視の進行が課題となっており、進行に伴う眼軸伸長は将来的な眼疾患リスクとの関連も指摘されている。

■ 研究開発

Phase 3 LPO達成（国内）
中国にて追加試験の実施を検討中

近視の市場規模

28兆円

対象患者数：26億人

TLG-001J 主要解析結果の概要

- **高い安全性を確認**（対象セグメントにおいて）
- 以下の項目において、**医薬品（0.01%アトロピン点眼）と同程度の有効性を確認**（過去データとの比較）
 - ・ 調節麻痺下他覚的屈折値（等価球面度SE）
 - ・ 眼軸長 ※次ページ参照

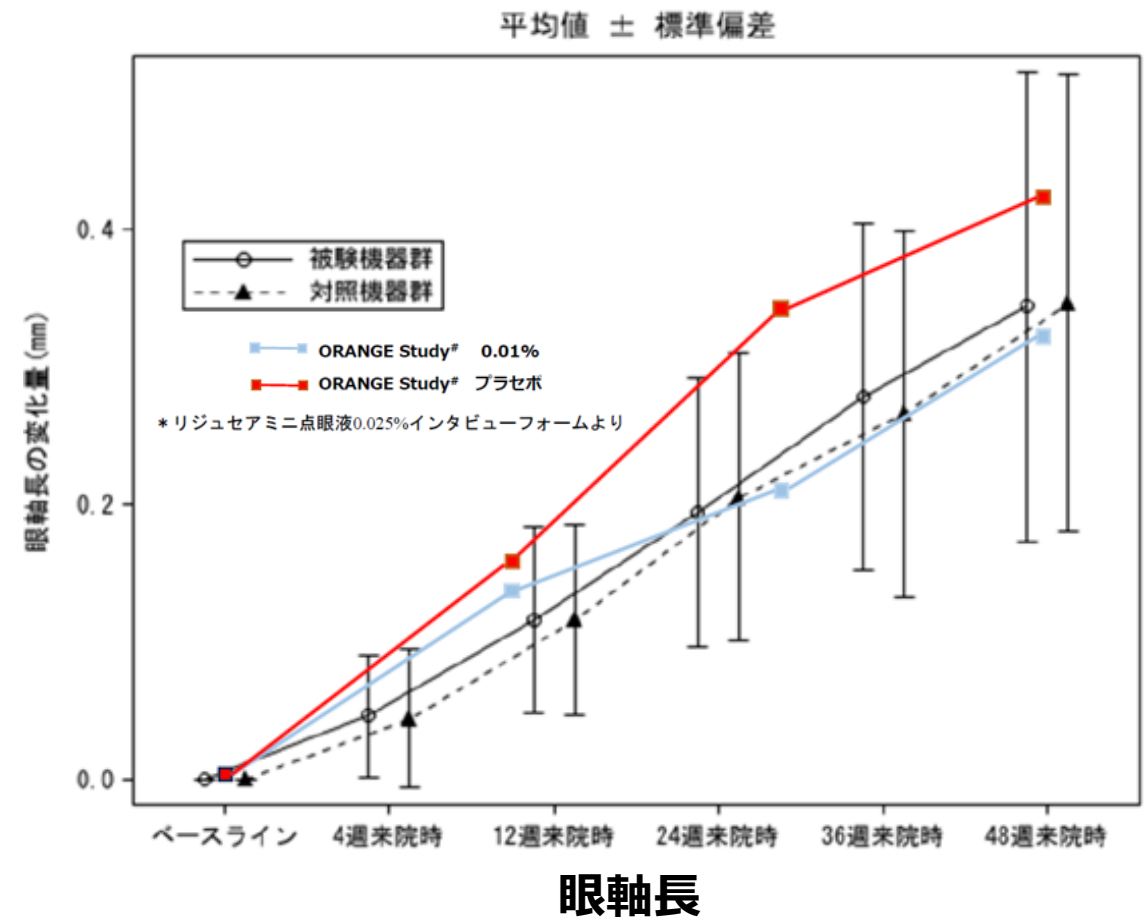
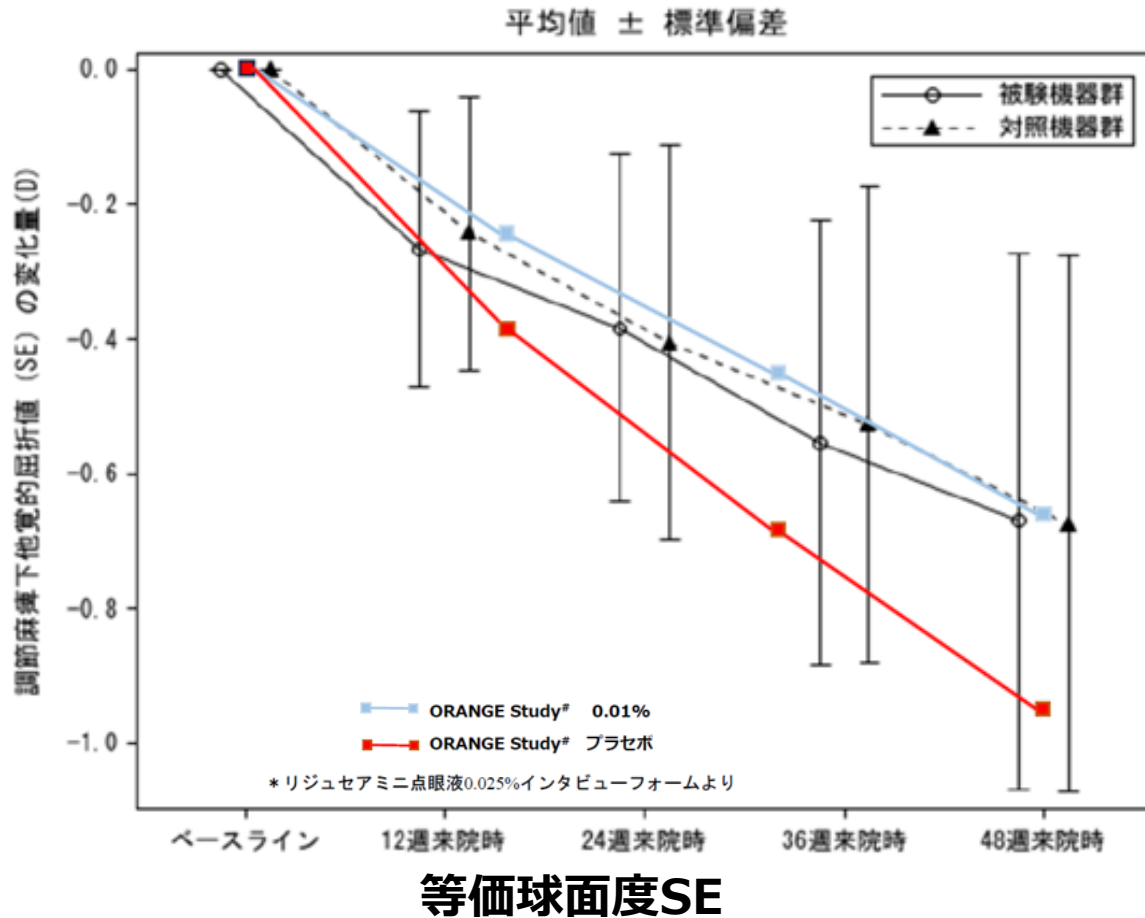
■ 脈絡膜厚

全体：2群間での有意差なし
一般的に、近視の児童は脈絡膜厚が薄くなるが、両群とも脈絡膜厚はほぼ維持された

層別解析を実施した結果、

- **屋外活動時間が短い被験者群では、眼軸長および調節麻痺下屈折値の両方で近視進行抑制が示唆される結果が確認された**
- **対象機器群での、既報と同程度の有効性は、屋外活動による影響の可能性を示唆**

TLG-001と既報の0.01%アトロピン点眼との比較



全体：2群間での有意差を認めなかったが、

被験機器・対照機器の両群とも既報の0.01%アトロピン点眼とほぼ同等

特定臨床研究実施中のパイプライン

TLM-017（眼GVHD）

■ TLM-017について

TLM-017は、**眼GVHDによる角結膜障害・重症ドライアイを対象とした点眼薬**の開発パイプラインである。本剤は、幹細胞機能に着目した新規点眼薬候補であり、**有効性と長期投与時の安全性の両立を目指して開発**を進めている。本パイプラインでは、炎症や眼表面環境に関する評価を通じて、眼GVHDに伴う角結膜障害に対する新たな開発可能性を検討している。

■ 疾患の特徴

眼GVHDは、慢性GVHDに伴って発症することがある眼表面疾患であり、角結膜障害や重症ドライアイを伴う場合がある。ステロイド点眼等が用いられることがある一方、長期使用における緑内障、白内障、感染症リスクなどが課題とされている。

■ 研究開発

特定臨床研究

TLG-020（網膜色素変性症）

■ TLG-020について

TLG-020は、**バイオレットライトを活用した網膜色素変性症向けの眼鏡型デバイス**に関する研究開発パイプラインである。網膜の機能維持に関わるメカニズムに着目し、**安全性および遺伝子変異の種類を問わない開発可能性を探索**している。本パイプラインでは、網膜の構造・機能に関する評価を通じて、網膜疾患領域における新たな医療機器開発の可能性を検討している。

■ 疾患の特徴

網膜色素変性症は、遺伝的要因により発症する進行性の網膜疾患である。夜盲や視野狭窄などの症状がみられ、進行すると視機能に大きな影響を及ぼすことがある（成人視覚障害原因の第2位）。原因遺伝子は多数存在し、遺伝子変異の種類によって病態が異なるため、幅広い患者層に対応し得る治療の開発が課題とされている。

■ 研究開発

特定臨床研究

強いサイエンスを支える研究体制

慶應義塾大学に加え、国内外で複数の研究室と連携し、研究開発を推進

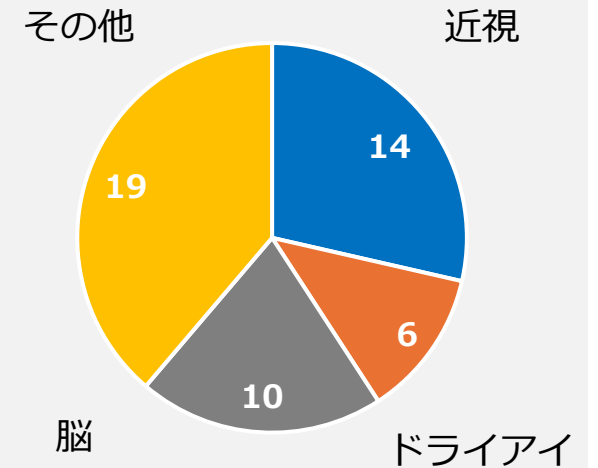


慶應義塾大学以外の
国内提携先
7つ

当社の研究人員

※2026年4月時点

計49名



研究員の多くを業務委託にすることにより、必要なスキルを有した研究員を適宜確保をし、研究を推進することができる。またコストの流動化も可能となる。

最新の知見が集う坪ラボ学会

坪ラボ学会は、年に一度約60名の共同研究者の方々がCRIKに集結し、坪田ラボとどのような研究を行っているのか、どう開発につなげていくのかを議論する場。共同研究型ベンチャーとしての新たな価値の創出の起点である。



第3回坪ラボ学会の様子（2025年10月14日 @ CRIK信濃町）

強固な知的財産基盤と圧倒的な研究開発力

※2026年1月時点

特許件数 65件 うち、32件が登録済み

近視

36件

老眼

2件

ドライアイ

14件

その他

13件

※同じ案件で国内外に出しているものは1件とカウント

既存のもののみカウント

坪田ラボ（株式会社ドライアイKT、有限会社坪田含む）が出願人のもの及び慶應が出願人で坪田ラボが優先的に事業実施できるもの

他社との共同出願のものは含む

他社のみでの出願のものは除く

ファミリーはまとめて1カウント

4

事業計画

坪田ラボの成長ステージの進化

	～2025年	2026年度以降
事業モデル	研究開発型	研究開発型 + 事業機能強化へ
収益モデル	アーリーステージ導出	アーリーステージ導出 + レイトステージ導出
顧客	BtoB中心	BtoB + BtoC
強み	パイプラインの価値 (医薬品・医療機器)	クロスドメイン戦略 (医薬品・医療機器・ヘルスケア)

坪田ラボは、眼・光・老化を科学し、医薬品・医療機器・ヘルスケアへ展開する、
ビジョナリー・イノベーション企業である

2026年3月期のトピックス

研究開発の進捗

- **主力パイプラインは着実に進展**
 - **TLM-001 : Phase 2a 開始**
(想定適応症：マイボーム腺機能不全)
 - **TLM-003 : Phase 2 被験者組み入れ完了**
(想定適応症：近視)
 - **TLM-017 : 特定臨床研究開始**
(想定適応症：眼GVHD)
 - **TLG-020 : 特定臨床研究開始**
(想定適応症：網膜色素変性症)
 - **TLG-001 : 国内臨床試験終了**
(想定適応症：近視)

財務・その他事業等の進捗

- **契約一時金の未計上により売上・利益ともに計画未達**
 - 業績下方修正の主因：大型契約の期ズレ
 - 費用面はコントロール継続、研究開発投資は維持
- **TLM-018関連製品の上市**
- **ハーバード大学の研究を基盤にしたサイエンスコスメ「aeonia」国内独占販売開始**
- **坪田が「The 2026 Moacyr Álvaro Gold Medal」を受賞**
- **ワシントン州エバレット（シアトル地域）に米国事務所を開設。**

2027年3月期の通期業績予想の概要

R&D投資を拡大しながら、黒字を確保へ

(単位：百万円未満切捨て)

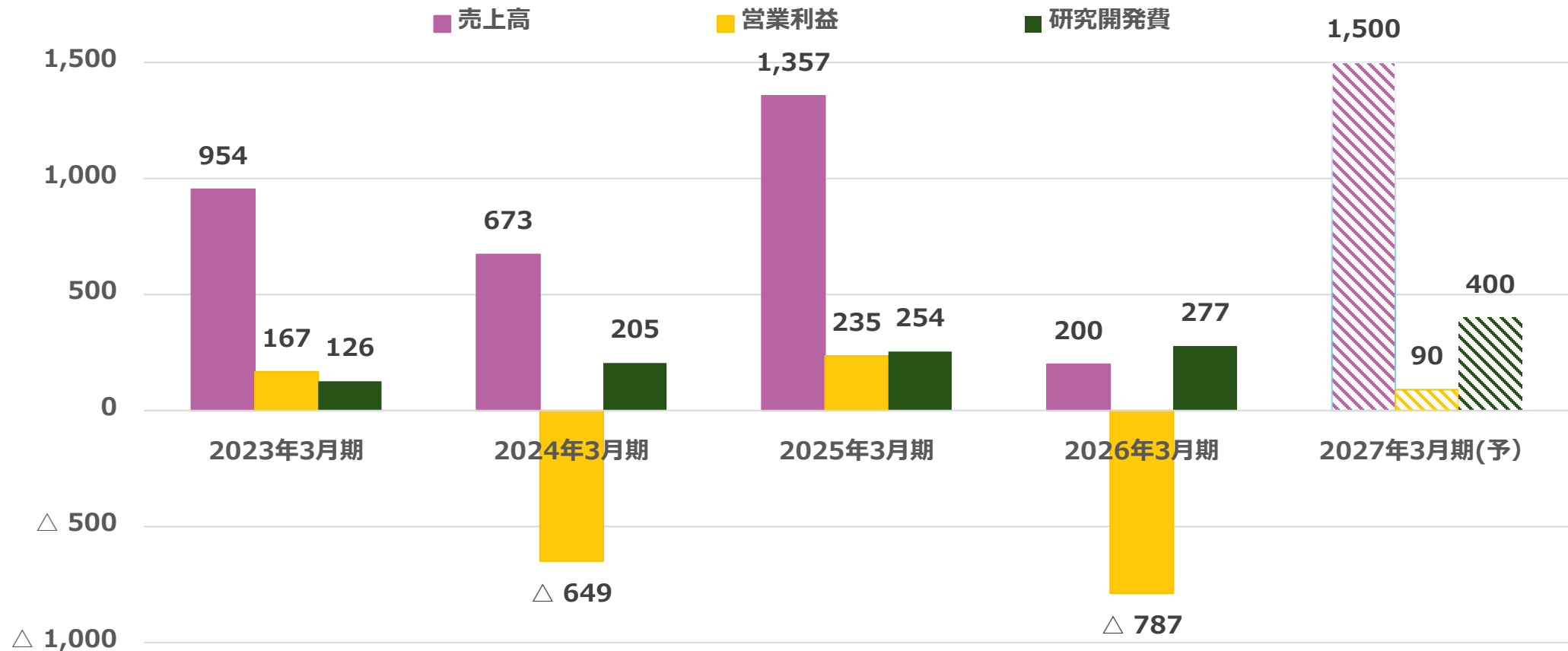
	2024年3月期	2025年3月期	2026年3月期	2027年3月期	前年比増減
売上高	673	1,357	200	1,100~ 1,500	949~ 1,349
営業利益	△649	235	△787	5~50	792~837
経常利益	△636	281	△760	45~90	805~850
当期純利益	△641	205	△761	45~90	806~851
研究開発費	205	254	277	400	122
研究員数*	38	43	49	N A	

※ 社外の業務委託研究員を含む。：必要なスキルを有した外部研究員を活用することにより、研究開発を推進し、且つ、コストの流動化を実現する。

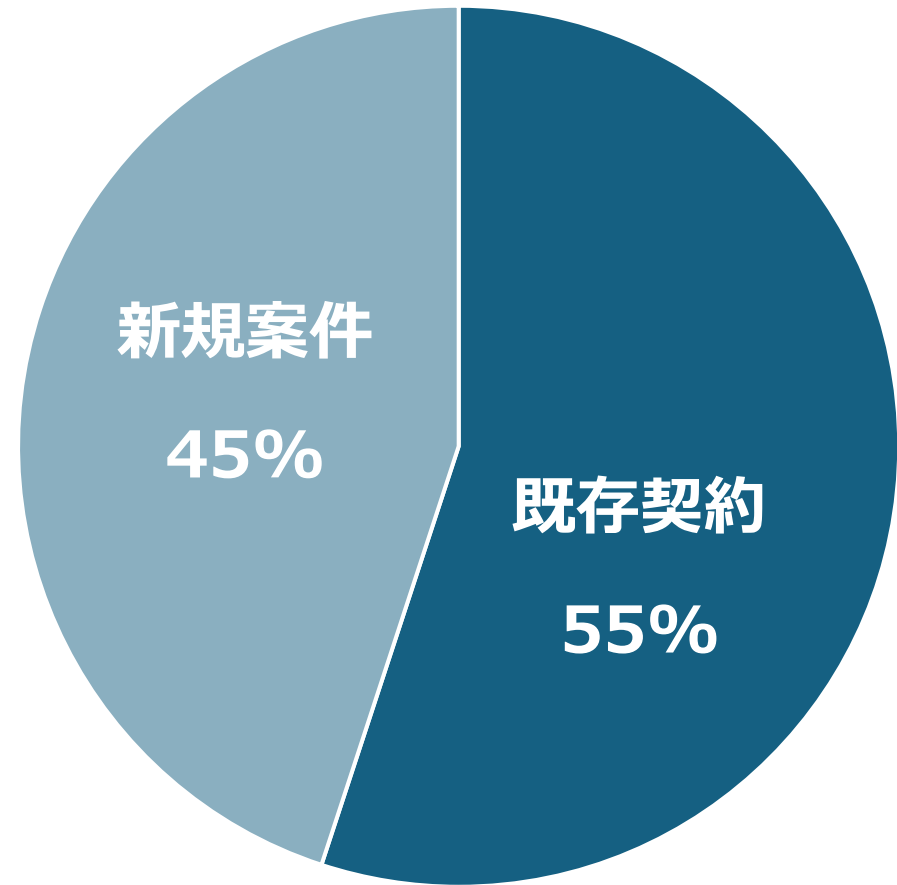
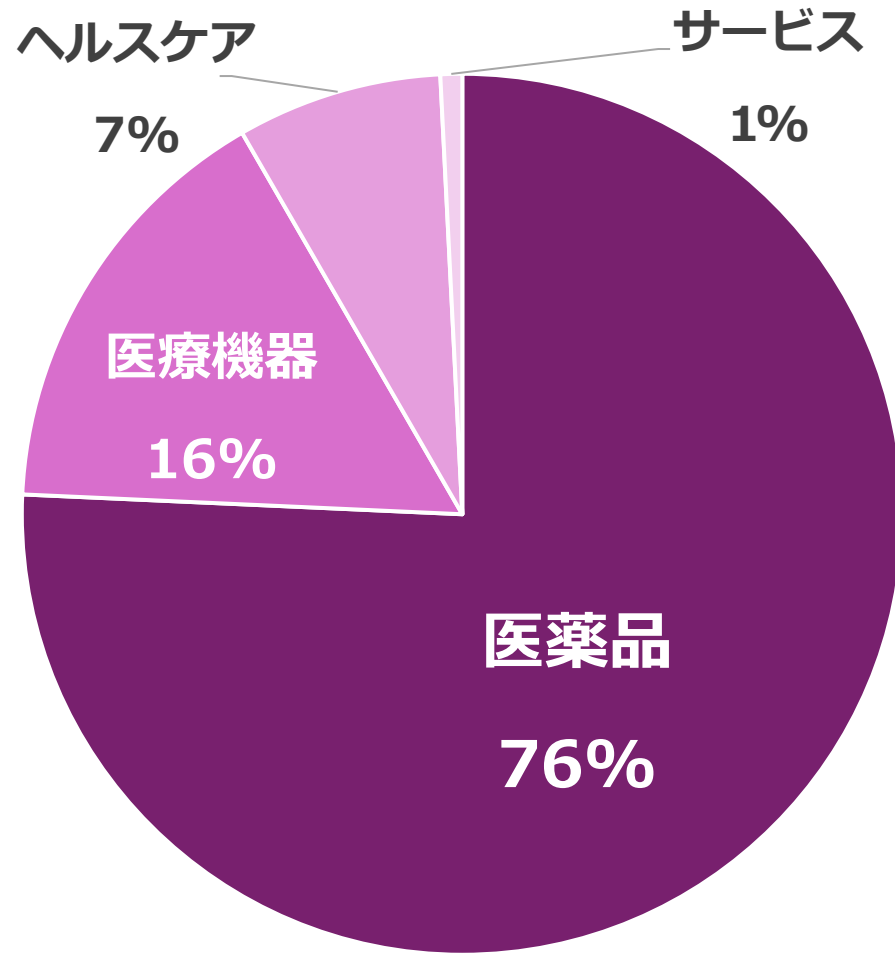
2026年3月期の研究開発費は、大型契約の期ずれによる契約一時金の未計上を踏まえ、一部投資時期を見直した結果、計画550百万円に対し277百万円となりました。なお、研究開発投資を削減したのではなく、開発は順調に進捗しております。

2027年3月期売上見通し

売上高11~15億円 黒字転換へ



既存パイプラインの売上貢献イメージ



財務状況

(単位：百万円)

	2025年3月期末	2026年3月期末		
		前年増減額	主な増減要因	
流動資産	2,445	1,281	△1,164	大部分は「現金」と「売掛金」の減少 売掛金の減少は、前期大型契約で発生した債権が回収されたことによるもの
固定資産	57	37	△20	新たな大型設備投資はなく、既存資産の償却が中心
資産合計	2,503	1,318	△1,184	資産規模は縮小したものの、その主因は前期導出契約に伴う売掛金の回収と研究開発投資によるもの。資産内容の健全性に大きな問題はありませぬ。
流動負債	846	407	△438	契約関連負債や引当金が大幅に減少 法人税納付も負債減少要因
固定負債	69	46	△22	有利子負債の圧縮が進展。 財務健全性の観点ではプラス要因。
負債合計	915	454	△460	負債は前期比約50%減少。契約関連負債の解消や借入金返済が進んだことで財務基盤はより健全な構造となりました。
資本合計	1,587	863	△723	当期純損失7.6億円が純資産減少の主因 自己資本比率は63.4%→65.5%へ上昇しており、依然として高い財務健全性を維持。
負債及び資本合計	2,503	1,318	△1,184	大型導出契約の反動により純損失を計上した結果、純資産は減少。同時に契約関連負債や借入金も減少し、バランスシート全体はスリム化。

2027年3月期の重要事項

- | | | |
|----------------------|----------|---------------------------------------|
| Pharma-
ceuticals | 1 | TLM-001 の国内Phase 2a 試験 LPO |
| | 2 | TLM-003 の臨床試験の進展（日本、Europe、中国） |
| | 3 | TLM-023 の新規導出契約 |
| Medical
Device | 4 | TLG-001 の中国治験開始 |
| Consumer | 5 | サイエンスコスメ「aeonia」の販売加速 |
-

直近の資金調達と成長投資への活用方針

当社のステージ移行と企業価値向上を目指し、成長投資を加速

1. 資金調達の背景

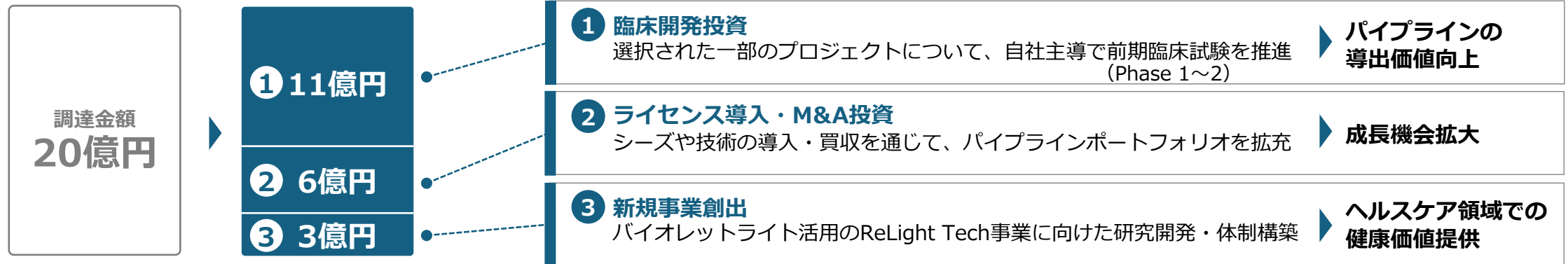
市場環境

- 製薬企業等において、導入候補パイプラインに対する開発リスクの見極めが一層重視される傾向
- こうした市場環境を踏まえ、提携や導出機会の最大化に向けて、パイプラインごとに最適な開発ステージと導出タイミングを見極める重要性が上昇
- メディカル領域では接点を持ちにくい潜在ニーズ層が存在し、ヘルスケア製品としての価値提供余地がある（VLに関して）

当社の成長フェーズ

- パイプラインの拡充が進む中、有望パイプラインを選択的に前期臨床試験段階まで育成し、導出価値の向上を目指す
- 事業拡大を推進する人員体制の整備が進み、パイプライン開発を自社主導で進める基盤が整っている
- 創業者の知見・ネットワークを起点とした事業開発力を、組織的かつ再現性のある成長基盤へ発展させるべく、CCCコンセプトを基盤に共同研究先との新規シーズ創出を加速させる
- 外部技術の導入・M&Aを活用し、持続的なパイプライン拡充体制の基盤を、整備する段階
- ReLight Tech事業を通じて、VL技術をヘルスケア製品として展開し、潜在ニーズ層への価値提供を目指す

2. 中長期での資金使途



3. 会社が目指す姿

当社は、メディカル領域において、早期導出を基本としながら、一部パイプラインでは自社主導で前期臨床試験まで進めることで、パイプライン価値の最大化を図る。あわせて、ヘルスケア領域（ReLight Tech事業）へ展開することで、収益機会を多層化し、単一の収益モデルに依存しない事業構造の確立を目指す。それにより、従来の創業ベンチャーに見られる収益の不確実性の低減を図りつつ、パイプライン価値の向上による中長期的な企業価値の向上につなげる。

上場時における調達資金の主な使途

(千円)

主な資金使途		予定金額	決算期				累計	
項目	詳細		2023/3実績	2024/3実績	2025/3実績	2026 /3実績		
運転資金	研究開発費	治験費用	370,704	235,557	135,147	—	—	370,704
		基礎研究費	429,252	126,266	205,296	97,690	—	—
	人員採用	65,043	15,214	28,000	21,829	—	—	65,043
投資	米国子会社設立	100,000	0	0	0	—	1,910	1,910
借入金返済	有利子負債返済	60,000	60,000	—	—	—	—	60,000

※ボストン子会社設立につきましては、ワシントン州エバレット（シアトル地域）に米国事務所を開設。

業務遂行上の重要なリスクおよび対応方針

項目	リスクの概要	発生可能性	発生する可能性のある時期	影響度	リスクの対応策
医薬品、医療機器等法その他の規制に関する事項	当社の属する医薬品及び医療機器業界は、研究、開発、製造及び販売のそれぞれの事業活動において、各国の医薬品、医療機器等法、薬事行政指導、医療保険制度及びその他関係法令等により、様々な規制を受けております。研究開発期間中に当初は見込んでいない法的規制の改定等により、医薬品及び医療機器として規制当局が認めない場合には、承認が計画どおり取得できず当社の業績及び財政状態に重大な影響を及ぼす場合があります。	中	特定時期なし	小	当社では製造販売をせず、パートナー企業により製造及び販売をするビジネスモデルになっております。よって、このような法的規制の変更にも耐えうる規模のパートナー企業と契約を事業を推進するようにしております。
競争について	医薬品及び医療機器業界は、国内外の製薬企業、バイオ関連企業、研究機関等が激しく競争しており、技術革新が急速に進む環境下にあります。このため、これらの競合先との競争の結果により、当社がライセンスアウトした開発品あるいは研究開発中の開発品が市場において優位性を失い、研究開発の中止を余儀なくされるおそれがあります。また、当社の開発品がいち早く上市できた場合でも、これらの競合先が優位性のある製品を市場に投入し、当社の市場シェアが奪われる場合、当社の業績及び財政状態に重大な影響を及ぼす場合があります。	小	特定時期なし	中	当社では複数のパイプラインを保有し、医薬品、医療機器だけではなくコモディティ製品のデュアル戦略により、リスク分散をしております。さらに、ライセンスアウト後もパートナー企業とライセンス強化すべく共同研究をも実施し、優位性保持に心掛け、事業を推進するようにしております。
資源投入リスク	当社は、上場時の公募増資等により調達した資金を用いて、研究開発の強化及び研究員を拡充することとしております。当該計画に基づき、研究開発力を核とした持続的成長を実現するための研究開発に、積極的に経営資源を投入する方針であり、上場後2022年以降も引き続き、特定臨床研究費及び治験費への投入を計画しております。しかしながら、研究開発の成果が目標から大きく乖離した場合には、業績等に影響を及ぼす可能性があります。また、臨床試験の結果、予測していた有効性が証明できない、あるいは予測していない副作用が発現した等の理由で承認申請を断念しなければならぬ可能性があります。	小	3年以内	中	当社では複数のパイプラインを保有し、さらに眼疾患以外の分野の研究も進めており、リスク分散をしております。また、薬事戦略を練ったうえで研究開発も進めており、ライセンスアウト先のパートナー企業との交渉も優位性保持に心掛け、事業を推進するようにしております。

※上記以外のリスクについては、有価証券報告書「事業等のリスク」をご参照ください。

5

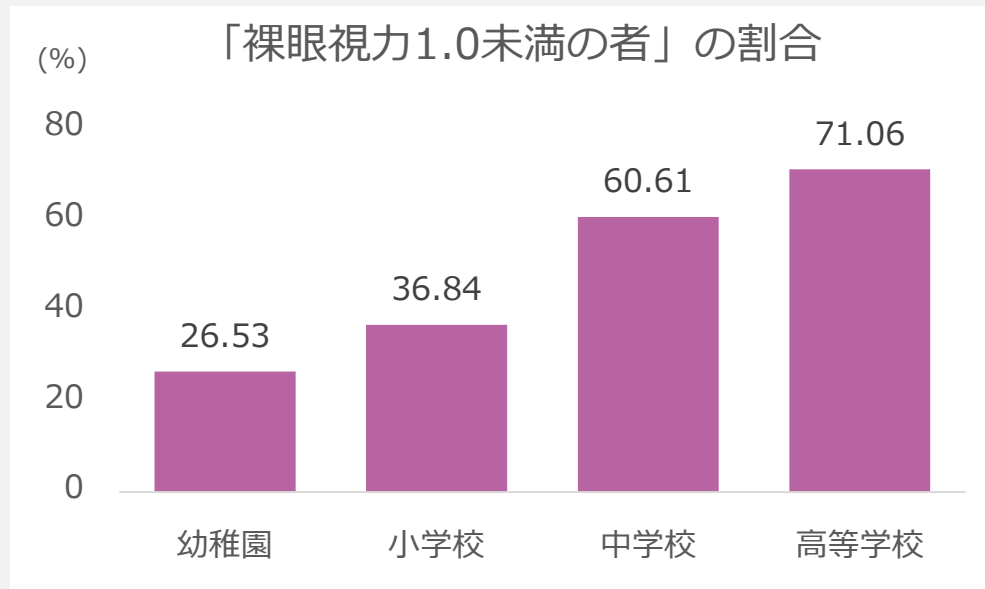
Appendix

市場可能性：近視市場の急速な拡大

近視人口は世界的に急増しており、
WHOは2050年には世界の50%が近視になると警鐘を鳴らしている

児童の近視割合

日本の高校生は**7割**が近視。
経済損失年15兆円、**2026年は近視治療元年と注目**
中国では、近視が深刻な社会課題となっており、
「青少年近視予防法案」が2018年に発布された。

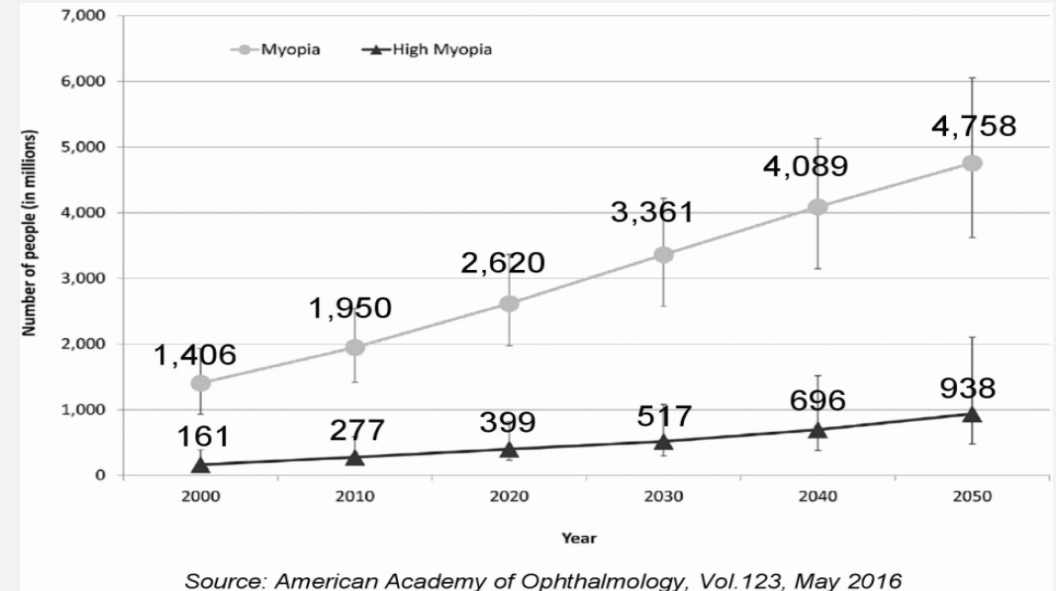


※文部科学省「令和7年度学校保健統計」

世界の近視人口の予測推移

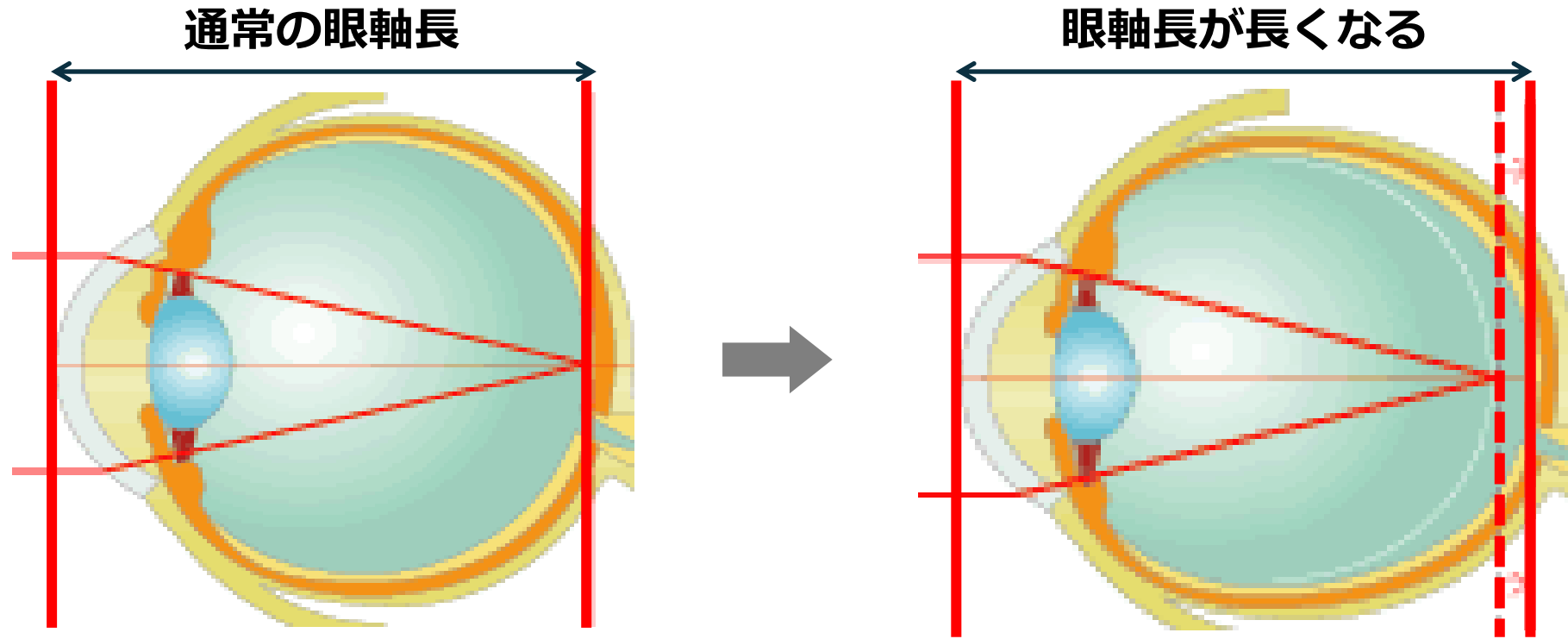
2000年に14億600万人だった近視人口は、
2050年には47億5800万人にまで増加すると予測
されている。

→10人に1人が失明のリスクを抱える



※Brien Holden Vision InstituteおよびUniversity of New South Walesでの研究の
調査結果 2016年5月

近視は眼軸長が伸びる病気



眼軸長が伸びるとピンと合わなくなる

眼軸長の伸長には、

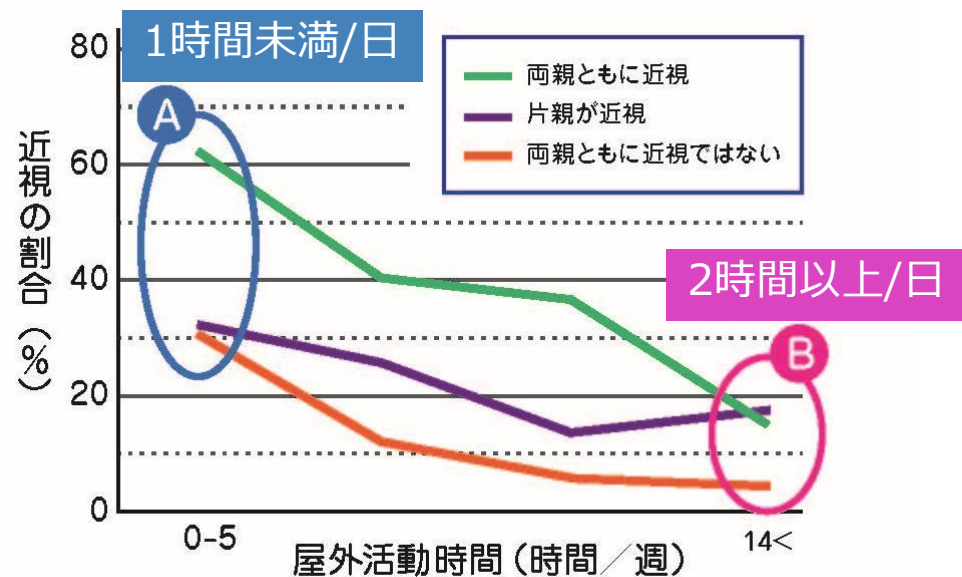
- 遺伝因子
- 環境因子

これら2つの要因が影響している

➡近視を予防するには、環境因子のコントロールが大切！

近視と屋外活動時間の関係

両親とも近視でも、屋外活動時間で近視リスクは低下



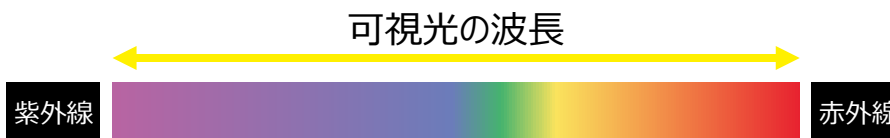
Jones et al. 2007 *Invest Ophthalmol Vis Sci.* 48(8):3524-32.

PNAS 2021
Vol. 118 | No. 22

Violet light suppresses lens-induced myopia via neuropsin (OPN5) in mice

Xiaoyan Jiang^{a,b,1}, Mabelle T. Pardue^{c,d,1}, Kiwako Mori^{a,b}, Shin-ichi Ikeda^{a,b}, Hidemasa Torii^{a,b}, Shane D'Souza^e, Richard A. Lang^{e,f}, Toshihide Kurihara^{a,b,2}, and Kazuo Tsubota^{a,9,2}

太陽光に含まれるバイオレットライトは、非視覚系オプシンOPN5を介して脈絡膜の血流を保持することによって近視進行を抑制することが確認されている。



バイオレットライト

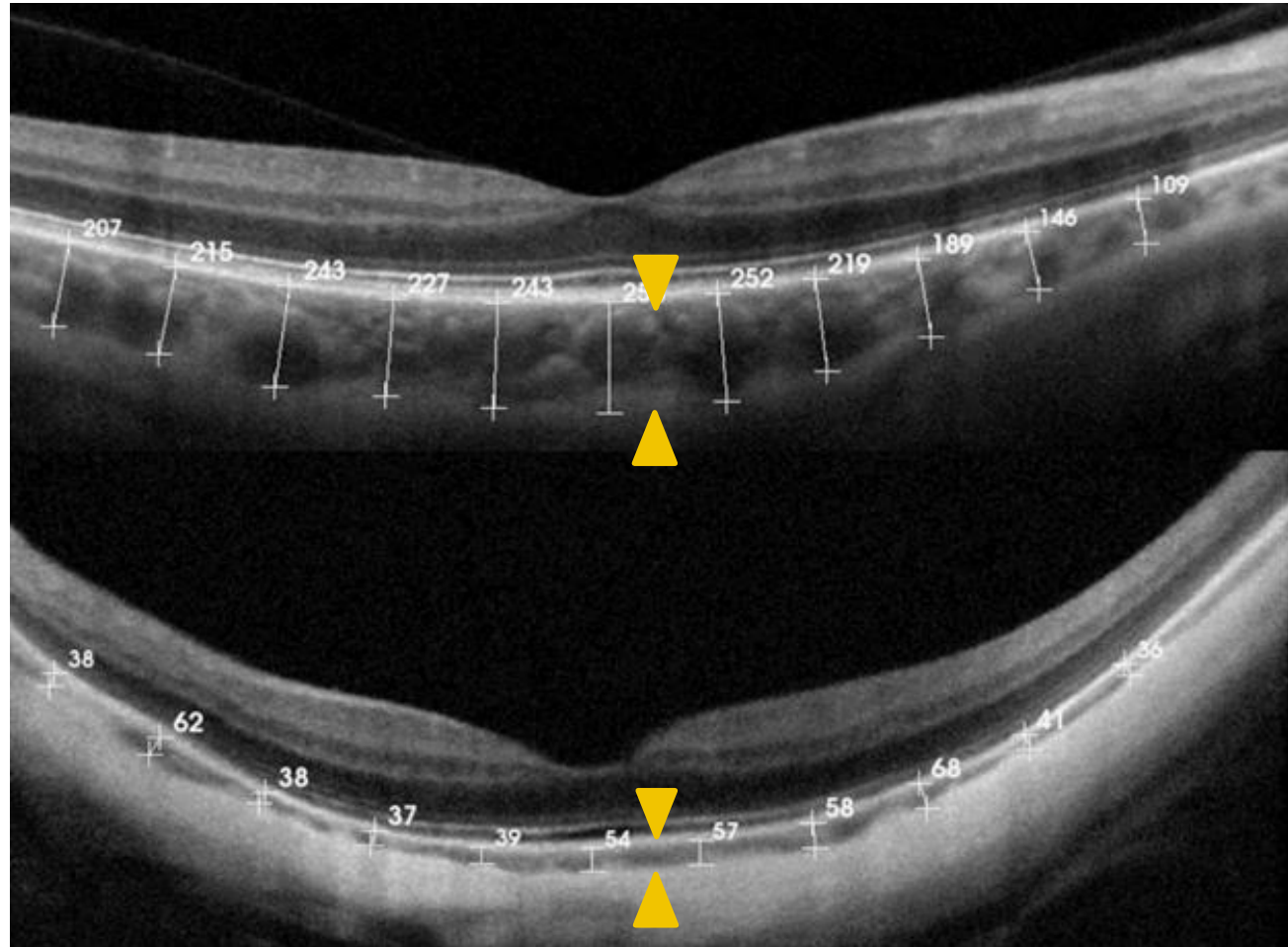
(360~400nmの可視光)

- ✓ 自然光 (太陽光) に含まれる
- ✓ 人工光 (照明器具) には含まれない
- ✓ 紫外線 (UV) カット製品 (ガラス・レンズ等) により、バイオレットライトまでカットされている

現代の子供は
バイオレットライトを
浴びる機会を失っている

近視では脈絡膜が薄い

正常



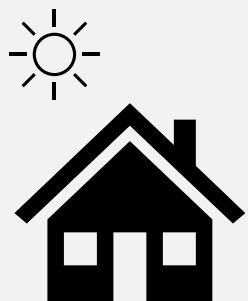
近視

Flores-Moreno, et al. 2013 *Am J Ophthalmol.* 155(2):314-319.e1.

ヒトは、視覚以外にも光を受け取る仕組みを持っている

ヒトには9つのオプシン（光受容体）があり、当社はOPN5に着目している

1. ヒトには9つの光受容体が存在する
2. 視覚型オプシンと非視覚型オプシンに分けられる
3. OPN5はバイオレットライトに応答する非視覚型オプシンである



現代の光環境

現代の生活では、日中は屋内生活や窓ガラスにより必要な光が不足し、夜間には人工光やブルーライトにさらされる機会が増えている。こうした光環境の変化は、光受容体の働きや昼夜リズムに影響を与える可能性がある。

視覚型 オプシン

- OPN 2 (グリーン)
- OPN 1 (ブルー)
- OPN 1 (グリーン)
- OPN 1 (レッド)

非視覚型 オプシン

- OPN 3 (ブルー)
- RLH (ブルー)
- **OPN5 (バイオレット)**
- OPN 4 (ブルー)
- RGR (ブルー)

当社が注目

市場可能性：ドライアイ、脳・中枢領域の市場

ドライアイ

発症要因

加齢、デジタルデバイス使用（まばたき減少）、乾燥環境、コンタクトレンズ装用により涙液の安定性が低下。

→**目の現代病**とも呼ばれている

症状

乾燥感、異物感、疲労感、痛み、かすみ（視機能低下）

世界の患者数

約**5～34億人**※

※日本国内だけでも約2,200万人が罹患。
診断基準や地域によって有病率に幅があるが、最大で人口の約半数に達するという報告もある
全世界の患者数は各種疫学データ等をもとに当社が推定値を算出

脳・中枢（うつ病・パーキンソン病）

発症要因

うつ病：心理的ストレス、環境要因、遺伝的素因に加え、脳機能・神経回路の変化が関与

パーキンソン病：加齢を背景に、ドパミン神経変性、異常タンパク（ α シヌクレイン）蓄積、遺伝要因が関与

症状

うつ病：抑うつ気分、興味・喜びの喪失、意欲低下、睡眠障害、食欲変化
パーキンソン病：振戦、筋強剛、動作緩慢、姿勢反射障害

世界の患者数

約**2億9000万人**※

（内訳：うつ病 約2.8億人+パーキンソン病 約850万人）

※患者数出典：WHO 最新Fact Sheet、およびグローバル疫学予測に基づく2025年時点の推計等を合算して当社作成

VISIONary INNOVATIONで
未来をごきげんにする



Tsubo Lab

「本資料の次回の開示は2027年6月を予定しております。」

免責事項

本資料には、将来の見通しに関する記述が含まれており、これは本資料作成時点における当社の判断・予測に基づいています。これらの記述は、将来の結果や業績を保証するものではなく、実際の結果とは大きく異なる可能性があります。

将来の見通しには、経済環境の変化、業界動向、規制の変更、技術革新、競合状況など、様々なリスクや不確実性が含まれ取り、それらによって実際の業績や財務状況が大きく影響を受ける可能性があります。

また、本資料に記載された他社・第三者に関する情報や、それらを基に作成された情報は、一般に公開された情報及び信頼できると判断した資料に基づいておりましたが、当社はその正確性や適切性について独自に検証しておらず、いかなる保証も行わないものではありません。

なお、本資料に含まれる製品・パイプライン情報（開発中のものを含む）は、広告や医学的アドバイスを目的とするものではありません。